

旬な農業高 話題豊作

小説・ライトノベル・漫画化続々

食の舞台 生き生き描写

農業高校を舞台にした小説や漫画が人気だ。単行本が累計で1500万部を超えた作品もある。農業を取り巻く現状が厳しさを増すなか、時には泥や汗にまみれ、コマや野菜、家畜の育て方を学ぶ若者たちへの共感が広がっているようだ。

「育て、収穫し、売る。体験はすぐリアルで、頼もしい」。作家・あさのあつきさん(60)岡山県美作市在住は生まれ育った岡山をイメージし、小説「グリーン・グリーン」を書いた。

舞台は山あいの県立農林高校。畜産、園芸、林業、食品化学……。動物の命や自然と向き合いながら、豚やヤギを育て、ジャムやハム、ヨーグルトをつくる生徒たちが描かれている。

主人公は都会育ちの教師・翠川真緑。行きつけの喫茶店でマスターから畑田米のおにぎりを食べさせてもらい、失恋で落ち込んでいた心身が癒やされた大学生時代。卒業後、その米がとれた村に住み、隣の町の農林高校で教え始める――。

そんな真緑を生徒たちは名前になんで「グリーン・グリーン」と呼び、地域の

増える耕作放棄地、どんなにこななる担い手……あさのさんは岡山で農業の衰退を間近に見てきた。「いつかは農業高校を舞台にしたい」。農業系の学科がある高校を取材し、自ら収穫にも取り組んだ。そこには黙々とネギを洗ったり、白菜の重さを量ったりする生徒たちがいた。土、肥料、野菜、花。授業に

人も温かく見守っていく。グリーン・グリーンは昨年5月〜今年3月に日本農業新聞で連載され、8月に徳間書店から出版された。

のうりん75万部・銀の匙150万部

実際にある岐阜県内の農業高校をモデルにしたライオン・ベルも中高生らの関心を集めている。

アイドルオタクの高校生や元アイドルの転校生らが登場する「のうりん」(GA文庫)。3年前に第1巻が出版されて以降、9巻までで計75万部に。アニメ化

もされた。コメディタッチに描きつつ、鳥獣被害や環太平洋経済連携協定(TPP)、遺伝子組み換え作物について考えさせられる場面も。作者の白鳥士郎さん(33)のもとには読者から「農業高校に行きたい」といった手紙も届いているという。

「農業を学ぶ子どもたちは誇りを持ってほしい。そして、こういう10代があることを多くの人に知ってもらいたい」。あさのさんは

「におい」を感じたという。グリーン・グリーンでは秋の収穫祭の場面が描かれている。学校を訪れた地域の人がたがずらりと列を作り、生徒が手がけた野菜やシクラメン、ポインセチアを買っていく……。あさのさんの思いが詰まったシーンの一つだ。

匙150万部

白鳥さんは「他人とごりごり競争する」というより、『自分のペースで自分のやりたいことを探して成長していきたい』という生き方が認められるようになったのではないかとみる。

週刊少年サンデー(小学館)で連載中の漫画「銀の匙」で連載中の主人公が悩みつつも世話をしたブタでベーコンを作るといった体験を通し、進む道を模索

する。作者は農家出身の荒川弘さんと、単行本は12巻で累計1500万部に達した。7月に出版された小説「アグリ」(相澤りょう、TO文庫)も高校農学科の生徒が里芋づくりに挑戦する物語だ。

農業大学の日常を描いた漫画「もやしもん」(石川雅之、講談社)、少女たちが農業に取り組む漫画「J A〜女子によるアグリカルチャー」(鳴見なる・唐花見コウ、角川書店)……。農業高校のほかにも、農業をテーマにした小説や漫画は多い。

「へえー」に満ちた世界に関心

人気の背景には何があるのか。マンガ解説者の南信長さんは「人間が生きていくうえで基本的な『食』の安全、食糧自給率の確保といったことへの人々の意識の高まりがあるのだらう」と話す。舞台設定が農業高校という点にも「目新しい」と指摘。そのうえで「農業高校は授業自体が多くの人にとって『へえー』という意外性と発見に満ちている。知らない世界をのぞき見る面白さがある」と言う。

人気漫画「鳥耕作」(弘兼憲史、講談社)のシリーズでも、農業が最近取り上げられた。明治大教授(マンガ文化論)の藤本由香里さんは「農業は生命と直結しているのに、これまで描かれることは少なかった。『農業には、手つかずの素材が眠っているのでは』という感覚が作り手に出てきて、読者にもその面白さが伝わっているのではないかと話している。(西江社)

